

バラード

暗い階段を下りてゆくと
そこには酒樽が数多置かれてあった
それを飲むとどうなるかを僕は知っていた
階段を見上げると陽光が明るかった
しかしそれはここから見上げるが故であった
僕はあそこから下りて来たのだ

かつて陽光は憧れであった
そしてそれは現在は幻滅に他ならなかった
僕が夢見ていた陽光はあの上にはなく
ただあったのは陽光の色をした世界であった
ああ今こそこの酒樽の栓を開く時だ

ランプに灯を入れると
闇は僕をそそのかすが如くに後ずさりし
僕は思わず出口を見上げた
そこを上り出れば再びここへは戻れず
この目の前の栓を抜けば
再び上ることはかなうまいと思われた

生きて在る証しを人々は求めず
ただ生活に棹さして流れ行く様から
僕は高貴な香りを嗅ごうと努めた
だがそれは果てなき中和の連続だった
ああ、それでこの心が安らぎを覚えたなら
僕は今ここになど立ってはいまい

鼻孔を刺す香りのある木の栓に手をかけると
さすがにためらう心が震えを帯びたが
僕は2度、3度とかぶりを振った、そして
何者も僕に絶望を与えることはできない
それはこの樽にしたところで望むべくもないのだ、と
震える心に諦めを囁いた

栓が抜かれた樽の口から透明な液体が
置いてあったグラスを満たすと
僕は喜びとも諦めともつかぬ息を吐いた

全てはこれで決定的となるのだ
地下生活者としての人生が、これからは
少なくとも僕に震えを与え続けるのだ

力の抜けた右手でグラスを取り
もはや何のためらいもなくそれを口にすると
おお、何ということか！
それはおよそ酒などとは似ても似つかぬ代物だった
胸焼けのするような酸の敗残物だった
これは階上の世界での僕そのものではないか！

血眼になって全ての栓を抜いても
どれもみな同じだった
ああ、既に扉は閉ざされてあったのだ
膝を折った僕の口には知らず知らず
微笑が浮かんでいた
いずれにせよ決定が下されたのには違いないではないか

僕は何者も絶望を与えてくれはしないと知っていた
階段を上るのは決して気の重いことではなかった
あの世界がこのむかむかする胸焼けを再び中和してくれるのだ
僕は生き続けるだろう
幻滅という生を生き続けるだろう
震えることもなく
堂々と生き続けるだろう・・・

(1992.2.8)